

離散系列表現のある構成法

峰村 勝弘

この小文では、 $G = SU(1, 1) \cong SL(2, \mathbb{R})$ の離散系列表現が、 G の作用と可換な 1 階の微分作用素の核の L^2 部分空間に自然に構成できることを紹介する。関連する主系列表現やポアソン積分については、割愛させて頂く。

1. 離散系列

まず、 $G = SU(1, 1)$ の離散系列表現の構成を復習する。ここでは [2] を引用させて頂き、離散系列表現のよく知られた構成法を、結果だけについて述べる。詳細については [2],[3] を見て頂きたい。

$G_c = SL(2, \mathbb{C})$ とおく。 G_c のボレル部分群 B を下三角にとる。このとき $K = G \cap B$ は G の極大コンパクト部分群

$$\left\{ k_\theta = \begin{pmatrix} e^{i\theta/2} & 0 \\ 0 & e^{-i\theta/2} \end{pmatrix}; 0 \leq \theta < 2\pi \right\}$$

になっている。さらに、複素多様体 G_c/B 上の G の作用による、 G_c/B の原点 B の G 軌道 ($\cong G/K$) は G_c/B の開部分集合と同一視される。これによって G/K に複素構造をいれると、 G の G/K 上の作用は複素解析的である。任意の $n \in \mathbb{Z}$ に対し、

$$\tau_n : B \ni \begin{pmatrix} a & 0 \\ c & a^{-1} \end{pmatrix} \mapsto (a^{-1})^n \in \mathbb{C}$$

と定義すると、 τ_n は B の正則な指標となる。 τ_n に同伴した G_c/B 上の複素解析的直線バンドルを F_n とし、 F_n の G/K への制限を E_n で表す。 E_n の C^∞ 切断の全体は

$$C^\infty(E_n) = \{f \in C^\infty(GB); f(xb) = \tau_n(b)^{-1} f(x) \ (x \in GB, b \in B)\}$$

と同一視される。

$$D = \{z \in \mathbb{C}; |z| < 1\},$$
$$\tilde{D} = \left\{ \begin{pmatrix} 1 & z \\ 0 & 1 \end{pmatrix}; |z| < 1 \right\}$$

とおく $GB = \tilde{D}B$ で,

$$\tilde{D} \times B \ni (x, b) \mapsto xb \in GB$$

は複素解析的同型である. 任意の $f \in C^\infty(E_n)$ に対し

$$(A_n f)(z) = f \begin{pmatrix} 1 & z \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \quad (z \in D)$$

と定義する. 写像

$$A_n : C^\infty(E_n) \rightarrow C^\infty(D)$$

は上への線形同型写像である. 任意の $g \in G, f \in C^\infty(E_n)$ に対し

$$(V_n(g)f)(x) = f(g^{-1}x) \quad (x \in GB)$$

と定めると, $g^{-1} = \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ \bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix} \in G$ として,

$$\begin{aligned} (A_n V_n(g)f)(x) &= (V_n(g)f) \left(\begin{pmatrix} 1 & z \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \right) \\ &= f \left(\begin{pmatrix} 1 & \frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta} z + \bar{\alpha}} \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} (\bar{\beta} z + \bar{\alpha})^{-1} & 0 \\ \bar{\beta} & \bar{\beta} z + \bar{\alpha} \end{pmatrix} \right) \\ &= (\bar{\beta} z + \bar{\alpha})^{-n} (A_n f) \left(\frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta} z + \bar{\alpha}} \right) \end{aligned}$$

を得る. そこで, 任意の $g \in G, F \in C^\infty(D), z \in D$ に対して

$$(T_n(g)F)(z) = (\bar{\beta} z + \bar{\alpha})^{-n} F \left(\frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta} z + \bar{\alpha}} \right)$$

と定義すれば, 任意の $g \in G$ に対し

$$A_n \circ V_n(g) = T_n(g) \circ A_n$$

が成立する. 任意の $n \in \mathbb{Z}$ に対し τ_n を K に制限して得られる K の指標に同伴する G/K 上の直線バンドルを L_n で表すと, L_n の C^∞ 切断全体は

$$C^\infty(L_n) = \{ f \in C^\infty(G); f(xk) = \tau_n(k)^{-1} f(x) \quad (x \in G, k \in K) \}$$

と同一視される. $G \cap B = K$ であるから, $f \in C^\infty(E_n)$ に対して $f|_G \in C^\infty(L_n)$ であり, 写像

$$R_n : C^\infty(E_n) \ni f \mapsto f|_G \in C^\infty(L_n)$$

は上への線形同型である. $g \in G, f \in C^\infty(L_n)$ に対して

$$(\pi_n(g)f)(x) = f(g^{-1}x), \quad (x \in G)$$

と定めると任意の $g \in G$ に対して次の可換図式が成立する.

$$\begin{array}{ccccc} C^\infty(L_n) & \xrightarrow{\pi_n(g)} & C^\infty(L_n) & & \\ R_n \uparrow \cong & \circlearrowleft & R_n \uparrow \cong & & \\ C^\infty(E_n) & \xrightarrow{V_n(g)} & C^\infty(E_n) & & \\ A_n \downarrow \cong & \circlearrowright & A_n \downarrow \cong & & \\ C^\infty(D) & \xrightarrow{T_n(g)} & C^\infty(D) & & \end{array}$$

G の部分群 A, N を

$$A = \left\{ a_t = \begin{pmatrix} \cosh t/2 & \sinh t/2 \\ \sinh t/2 & \cosh t/2 \end{pmatrix}; t \in \mathbb{R} \right\}$$

$$N = \left\{ n_x = \begin{pmatrix} 1 + ix/2 & -ix/2 \\ ix/2 & 1 - ix/2 \end{pmatrix}; x \in \mathbb{R} \right\}$$

とおく. そして $G = SU(1, 1)$ 上のハール測度を dg を

$$\int_G f(g) dg = \frac{1}{4\pi} \int_0^{4\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f(k_\theta a_t n_x) e^t d\theta dt dx, \quad f \in C_c^\infty(G)$$

となるようにとる. 任意の $f \in C_c^\infty(G)$ に対しノルム $\|f\|$ を

$$\|f\|^2 = \int_G |f(x)|^2 dx$$

で定めると, $\pi_n(g)$ はこのノルムに関して等長写像となり, $C_c^\infty(G)$ の完備化を $L_2(L_n)$ とすれば $\pi_n(g)$ は $L_2(L_n)$ 上のユニタリ作用素, π_n は $L_2(L_n)$ 上のユニタリ表現となる.

さて, 任意の $f \in C^\infty(E_n)$ に対して $A_n f = F$ とおくと

$$\int_G |f(g)|^2 dg = 4 \int_{x^2+y^2 < 1} |F(x+iy)|^2 (1-x^2-y^2)^{n-2} dx dy$$

が成立する. $f \in C^\infty(E_n)$ について

$$\|f\|^2 = \|R_n f\|^2 = \int_G |f(x)|^2 dx$$

でノルムを定義し, $F \in C^\infty(D)$ についても, 各 $n \in \mathbb{Z}$ に対し

$$\|F\|_n = \|A_n^{-1} f\|$$

と定める. これらのノルムによる $C^\infty(E_n), C^\infty(D)$ の完備化を $L_2(E_n), L_2(D)_n$ と書く. このとき次のユニタリ同値なユニタリ表現の可換図式を得る.

$$\begin{array}{ccc} L_2(L_n) & \xrightarrow{\pi_n(g)} & L_2(L_n) \\ R_n \uparrow \cong & \circlearrowleft & R_n \uparrow \cong \\ L_2(E_n) & \xrightarrow{V_n(G)} & L_2(E_n) \\ A_n \downarrow \cong & \circlearrowright & A_n \downarrow \cong \\ L_2(D)_n & \xrightarrow{T_n(g)} & L_2(D)_n \end{array}$$

D 上の正則関数, 反正則関数が作る空間をそれぞれ $H^+(D), H^-(D)$ とし,

$$H_n^+(D) = L_2(D)_n \cap H^+(D), H_n^-(D) = L_2(D)_n \cap H^-(D)$$

とおく. $n > 1$ に対して, 表現 T_n を $H_n^+(D)$ に制限したものを T_n^+ とし.

$$T_n^-(g)F = \overline{T_n^+(g)\overline{F}}, F \in H_n^-(D), g \in G$$

として $H_n^-(D)$ 上の表現 T_n^- を定める. このとき

定理 (Bargmann) $n > 1$ に対して, $(T_n^\pm, H_n^\pm(D))$ は G の離散系列と呼ばれる既約ユニタリ表現を与える.

2. 微分作用素

この節では, 離散系列表現が, G の作用と可換な 1 階の微分作用素の核空間から自然に得られることを示す.

$G_c = SL(2, \mathbb{C})$ のリー環を \mathfrak{g}_c と書き. \mathfrak{g}_c の部分空間 \mathfrak{p}_c を

$$\mathfrak{p}_c = \left\{ \begin{pmatrix} 0 & z \\ w & 0 \end{pmatrix}; z, w \in \mathbb{C} \right\}$$

とおく。\$G\$ の極大コンパクト部分群 \$K\$ のリー環を \$\mathfrak{k}\$ と書く。\$B\$ の指標 \$\tau_n\$ の微分を \$\mathfrak{k}\$ に制限したものも同じ記号 \$\tau_n\$ で表す。\$\tau_n\$ の表現空間 (\$\cong \mathbb{C}\$) を \$V_n\$ で表し、\$G/K\$ 上の直線バンドル \$L_n, L_m\$ について、\$L_n\$ から \$L_m\$ への、\$G \ni g\$ の作用 \$\pi_n(g), \pi_m(g)\$ と可換な微分作用素全体を \$\mathbf{D}(L_n, L_m)\$ で表す。このとき次の線形同型が成立する。(肩の \$\mathfrak{k}\$ は不変元全体を表す。詳しくは [1] 参照。)

$$\mathbf{D}(L_n, L_m) \cong (S(\mathfrak{p}_c) \otimes V_n^* \otimes V_m)^{\mathfrak{k}}$$

\$\mathbf{D}(L_n, L_m)\$ の \$r\$ 階の作用素全体を \$\mathbf{D}^r(L_n, L_m)\$ と書く。\$\mathfrak{p}_c\$ の元 \$z_u, z_d\$ を

$$z_u = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad z_d = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}$$

とする。このとき次の補題が成立する。

補題 \$G\$ の作用と可換な 1 階の微分作用素について次の (1), (2) が成立する。

$$(1) \mathbf{D}^1(L_n, L_m) \neq 0 \Leftrightarrow |n - m| = 2$$

$$(2) \mathbf{D}^1(L_n, L_{n+2}) = \mathbb{C}z_u, \quad \mathbf{D}^1(L_n, L_{n-2}) = \mathbb{C}z_d \quad (n \in \mathbb{Z})$$

同型写像 \$S_n = A_n R_n^{-1}\$ により \$z_u, z_d\$ を \$D\$ 上に移したものをそれぞれ \$D_{u,n}, D_{d,n}\$ で表す。\$C^\infty(D)\$ を \$T_n(g)\$ により \$G\$ 加群と考えたとき \$C^\infty(D)_n\$ と書くことにすると、作り方から \$D_{u,n}, D_{d,n}\$ はそれぞれ \$G\$ の作用と可換な微分作用素で、各 \$n \in \mathbb{Z}\$ に対して可換図式

$$\begin{array}{ccccc} C^\infty(L_{n-2}) & \xleftarrow{\pi_n(z_d)} & C^\infty(L_n) & \xrightarrow{\pi_n(z_u)} & C^\infty(L_{n+2}) \\ S_n \downarrow \cong & \circlearrowleft & S_n \downarrow \cong & \circlearrowleft & S_n \downarrow \cong \\ C^\infty(D)_{n-2} & \xleftarrow{D_{d,n}} & C^\infty(D)_n & \xrightarrow{D_{u,n}} & C^\infty(D)_{n+2} \end{array}$$

が成立する。簡単な計算により

$$D_{u,n} = \frac{\partial}{\partial z} - \frac{n\bar{z}}{1 - |z|^2}, \quad D_{d,n} = (1 - |z|^2)^2 \frac{\partial}{\partial \bar{z}}$$

であることがわかる。\$C^\infty(D)_n\$ の部分空間 \$K_{d,n}(D), K_{u,n}(D)\$ を

$$K_{d,n}(D) = \ker(D_{d,n}) \cap L_2(D)_n$$

$$K_{u,n}(D) = \ker(D_{u,n}) \cap L_2(D)_n$$

で定める.

定理 離散系列表現について次の(1),(2)が成立する.

- (1) $(T_n, K_{d,n}(D)) = (T_n^+, H_n^+(D))$ ($n > 1$)
 (2) $(T_n, K_{u,n}(D)) \cong (T_{|n|}^-, H_{|n|}^-(D))$ ($n < -1$, ユニタリ同値)

略証 (1) は自明である.

(2) $\phi \in C^\infty(D)_n$ に対して, $(I(\phi))(z) = (1 - |z|^2)^n \phi(z)$ とおいて

$$I : C^\infty(D)_n \rightarrow C^\infty(D)_{|n|}$$

を定義する.

$$D_{u,n} = (1 - |z|^2)^{-n} \frac{\partial}{\partial z} \circ (1 - |z|^2)^n$$

と書けることから, I が $\ker(D_{u,n})$ から $H^-(D)$ の上への同型写像を与えることがわかる. $\psi = I(\phi)$ とおく. このとき

$$\begin{aligned} \|\psi\|_{|n|}^2 &= 4 \int_{x^2+y^2<1} |\psi(x+iy)|^2 (1-x^2-y^2)^{|n|-2} dx dy \\ &= 4 \int_{x^2+y^2<1} (1-x^2-y^2)^{2n} |\phi(x+iy)|^2 (1-x^2-y^2)^{-n-2} dx dy \\ &= 4 \int_{x^2+y^2<1} |\phi(x+iy)|^2 (1-x^2-y^2)^{n-2} dx dy \\ &= \|\phi\|_n^2 \end{aligned}$$

となるので, I は $K_{u,n}(D)$ から $H_{|n|}(D)$ の上へのユニタリ写像であることがわかる.

最後に $g^{-1} = \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ \bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix} \in G$ とすると,

$$\begin{aligned} T_{|n|}^-(g)(I(\phi))(z) &= (\beta\bar{z} + \alpha)^{-n} \psi \left(\frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta}z + \bar{\alpha}} \right) \\ &= (\beta\bar{z} + \alpha)^{-n} \left(1 - |(\alpha z + \beta)/(\bar{\beta}z + \bar{\alpha})|^2 \right)^n \phi \left(\frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta}z + \bar{\alpha}} \right) \\ &= (1 - |z|^2)^n (\bar{\beta}z + \bar{\alpha})^{-n} \phi \left(\frac{\alpha z + \beta}{\bar{\beta}z + \bar{\alpha}} \right) \\ &= (1 - |z|^2)^n (T_n^-(g)\phi)(z) \\ &= I(T_n^-(g)\phi)(z) \end{aligned}$$

従って

$$T_{|n|}^-(g) \circ I = I \circ T_n(g), \quad g \in G$$

□

注意 離散系列の極限についても同様の定理が成立する.

参考文献

- [1] Minemura K., *Invariant differential operators and spherical sections on a homogeneous vector bundle*, Tokyo J. Math. **15** (1992), no. 1, 231–245.
- [2] 岡本 清郷, *等質空間上の解析学*, 紀伊國屋数学叢書 19, 紀伊國屋書店, 1980.
- [3] Sugiura M., *Unitary Representations and harmonic analysis*, Kodan-sha 1975.